柳井嗣雄「化石樹」制作展示記録 2017/10/25~11/12

長屋門入口のすぐ右手裏の空間はかつて柿渋作りなどの農事に使われていた

「化石樹」φ130×370cm(flexible) 2 体　2017 年
メタセコイアの樹皮繊維による紙

深井家長屋門正面

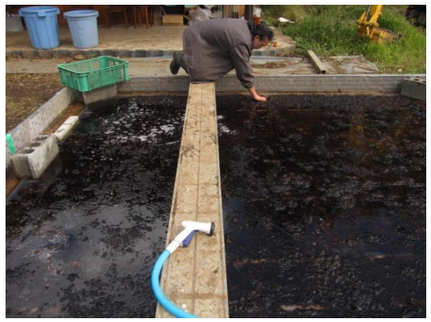
中天井の梁にも太い材が使われている

メタセコイアの発見はドラマチックであった。一昨年（2016 年）、見沼で我々が行った「TANBO プロジェクト」で、私は「農と芸術」の関係に興味を持ち田んぼの中に設えたプールで 10m の藁の紙を漉いた。その期間中、道端に山積みになったメタセコイアの丸太を偶然見つけたのだ。今度はこの樹皮繊維を使って紙を漉きたいと咄嗟に思った。

純粋に紙素材の研究からそう思った訳だが、メタセコイアについて調べれば面白い発見がいくつもあった。人類が誕生するよりもずっと昔から存在していたこと、化石しか発見されていなかったため絶滅種とされていたこと、1945 年に中国の四川省で現存種が発見され 、「生きた化石」として有名になったこと、戦後、進駐軍から日本に最初に 100 本の苗木がもたらされたこと、昭和天皇がメタセコイアを「あけぼの杉」と呼び全国にひろめたこと等々、地球史的、文化史的な想像力をもかき立ててくれる。

さらに、この田園地帯を歩いていると江戸時代にタイムスリップしたような建築に出会った。細い道の突き当たりに、深井家長屋門（さいたま市指定文化財）は堂々と静かに佇んでいた。大きな茅葺の屋根を持った格式のある門構えで、弘化元年（1844 年）に建てられた当初の姿をそのまま伝えている。舞台は整った。

まずは原料作りからだ。メタセコイアの樹皮は煮熟時間短縮のため半年前から土中に埋めておいたが、発酵するまでには至らなかった。それでも強アルカリで 2 時間煮込めば充分だった。未知の素材なのでデータがなく、最初の窯では 3 時間の煮熟で繊維は打解したようにボロボロになってしまった。何度も経験している杉皮を基準に考えていたのが間違いだった。杉皮に比べメタセコイアの樹皮は成長が早いせいか樹質と同様、柔らかく脆い繊維なのだ。都合 3 窯、90kg の樹皮から採取できたのはおよそ 25kg の繊維だった。
4×3m プールの中に漉桁を沈め原料を投入。水はプールに穴を開けて地下浸透させた。結局、漉いたのは 2 枚だったが、途中 2 度の台風に見舞われ予定通りにはいかず、設置当日にギリギリで乾燥した。なお、展示は比較のために自宅で漉いた杉皮紙と合わせて 3 体のインスタレーションになったことを付け加えておく。

メタセコイアの身体は空洞化された姿で直立している。紙に変容した樹皮は失われた物質と蘇る生命の間で、長屋門の記憶の中に宙吊りにされ揺れ動くだろう。土地や場所固有の物語はメタセコイアの地球史的時間軸の中で、人間の営みと原初のエナジーとが連動を始めるに違いない。現実とは違うもう一つの風景が、私たちが住む物質世界にあらたな創造的な枠組みを提示してくれるかもしれないと夢みて。

2018 年 2 月 9 日記